公益社団法人
日本語教育学会

2022 年度第５回支部集会【関西支部】　開催報告

主催：公益社団法人日本語教育学会
開催日：2023 年 3 月 18 日(土)13:00-16:00
実施方法：オンライン開催（Zoom ミーティング）
参加者：71 名（会員 46 名、一般 25 名）

昨年度と同様、オンライン開催で、2022 年度第 5 回支部集会【関西支部】を行いました。ワークショップが日本語教育界全体に関わるテーマであったため、関西支部以外の地域からの参加者が半数を占めました。一般の方の参加も多く、日本語教育の参照枠への注目度の高さが窺えました。本集会は、ポスター発表 1 件、ワークショップという構成で行いました。

ポスター発表は、「コロナ禍における日本語学校のオンライン授業が学習者に与えた影響」というタイトルで、3 名の方が共同発表されました。冒頭発表者から少し説明があったあと、質疑応答やフロアとのやりとりが行われました。参加者からはオンライン授業の形態についての確認の質問や、半構造化インタビューについて対象者の選定方法や SCAT 分析の手法に関する質問が出ました。コロナ禍でオンライン授業が身近なものになったこともあり、参加者の関心も高かったようです。

ワークショップのタイトルは「『日本語教育の参照枠」についての理解と実践に向けて」でした。まず、文化庁国語課の松井孝浩氏が「日本語教育の参照枠」策定の経緯及び今後の方針について説明してくださいました。外国人との共生社会の実現に向けて、取り組むべき課題として日本語教育が取り上げられてきたことを再確認しました。その後、「NPO法人YYJ・ゆるくてやさしい日本語のなかまたち」の奥村三菜子氏が「社会的存在と行動中心アプローチの視点から教育実践を捉え直す」というタイトルで講演を行ってくださいました。「日本語教育の参照枠」の言語教育観の柱になっている考え方を、具体例を挙げながらわかりやすくご説明くださいました。参照枠のCan doはあくまでも例であり、Can doが先にあるのではなく、人間の行動が先にあるのだという言葉が印象的でした。講演のあと、ブレイクアウトセッションを行いました。学習者が社会的存在として多様な日本語を用いて「できること」を増やしていくことを支援する立場として、我々がしないほうがいいことは何か、したほうがいいことは何かをグループで話してもらいました。20分間のブレイクアウトセッションのあと、各ルームで書き込んだPadletの内容を見て、質問したいことなどをシェアする時間をとりました。意図を質問し合ったり、講師の先生に質問が飛んだり、活発な時間となりました。本ワークショップが、「日本語教育の参照枠」への理解を深め、実践を振り返るきっかけになることを願います。

開催後のアンケートでは、ポスター発表、ワークシップともに実り多いものだったなど、概ね好評を得ました。日本語教育の参照枠への理解が深まったという声もあり、参照枠の現場への活用など今後の展開について意見交換できる場の提供を引き続き模索していきたいと思います。

発表者の皆様、参加者の皆様、ならびに支部集会開催にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

（報告者：支部活動委員　内田さつき、ルチラ　パリハワダナ、木下謙朗）